

### <新刊紹介>里原昭著 「琉球弧の世界-大城立裕の文学」

中村, 馨 / ナカムラ, カオル

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

188

(終了ページ / End Page)

189

(発行年 / Year)

1998-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020016>

いただいている)へ通う」とある。同様の思いを抱く同窓生は少なくないだろうが、今谷さんは師の勧めと励みしで、大塚甲山に関する二冊の著作を成し、恩師を国語教育関係の講演会講師として東北の地に招聘することにも力があり、弘前の自宅に師を招きもした。その師事・傾倒ぶりは並みのものではない。本書には九六年の青森での恩師の講演記録(書誌学・文献学と近代文学)など、貴重な資料も収められている。

(しみず せつじ・通教部講師)

▽一九九七年 著者刊(入手は、弘前市宮園四―一二―七の著者に直接連絡)  
△著者 一九七一年卒 青森県立岩木高等学校教諭

里原 昭著

### 「琉球弧の世界——大城立裕の文学」

表題の「琉球弧」とは作家島尾敏雄氏の「ヤポネシア」論に発しているらしい。すなわち奄美諸島、沖縄諸島などの島々はそれぞれの島の地理的、歴史的に培われた民族的個性を持っているので、この地域の独自性から地域の個性を主張し、文化や思想を発想しなければならぬというものである。そしてその中心は何といっても沖縄であり、そこは作家大城立裕、そしてまた最近芥川賞をたて続けに受賞して注目されている沖縄の若い作家たちの立脚地でもある。著者里原氏は前著「琉球弧の文学・大城立裕の世界」(法政大学出版局刊)で大城文学を論じたが、今回はその続論であり、次のような

中村 馨

諸作品をとりあげている。「日の果てから」「かがやける荒野」「二世」「やさしい人」「ニライカナイの街」「鳥塚」「迷路」。里原氏がこの中で特に力点を置いているのは「かがやける荒野」という作品である。この作品の舞台は「廃墟」と化した戦後の沖縄(コザ市が中心)であるが、作者大城氏は荒野を不毛の地とせず、むしろカオスととらえているようだ。そして戦後の沖縄を回想し「米軍占領下の沖縄に帰って見たら、皮肉にもそこに“自由”があつた」といつている。この作品はさまざまな人間がリゾーム状にからみあつていわば、沖縄の戦後史を表象しているが、荒野は妙に明るく、カオスは創

造的ですらある。里原氏は、この作品について「この小説作法は、沖繩戦後のオキナワ人の精神風景の描出——オキナワ人の精神生活の悲喜劇、加害被害の立場、仮面と本顔、土俗と一般、人生の必然と偶然、類似日本人とオキナワ人などの実像を、その両義性の観点から普遍化している」と評している。

日・米という二重の支配下におかれた沖繩人は、また二面性をもって巧妙に生きなければならぬが、この虚実皮膜がヤブれるときガルシア・マルケス流のとぼけたユーモアを生む。またリゾーム状にからみ合った諸人物がアナキな状態で勝手に行動する様は、バフチンのカーニバル化に通ずるものがありそうだ。里原氏は「かがやける荒野」の作品論にあたって——「廃墟」を生きる精神の原風景——という副題を与えているが、これは日本の良質な戦後文学の出発点でもあった。すなわち坂口安吾の「墮落論」や「白痴」石川淳の「焼跡のイエス」などであり、これらはいずれも戦後の「廃墟」と化した荒野から出発している。この作品はそれまで被っていた日本的なるも

の、たとえば保田与重帥の「日本の橋」や、川端康成の「雪国」に見られる美しくもはかない駒子といった日本浪漫派流の美意識をスッパリ切断し、実態のみが通用するという真の“自由”を獲得している。この不逞のエネルギーは田村泰次郎の「肉体の門」へと引きつがれていくが、大城氏の「かがやける荒野」の主人公たちもまた、これら戦後文学に通ずる精神で荒野を生きるのである。里原氏の大城文学論も、そこに主題が設定されている。

(なかむら かおる・機関紙編集長)

▽一九九七年 本処あまみ庵刊九三三円  
▽著者 一九五九年卒 前著『琉球弧の文学』にて「沖繩タイムス賞」受賞。